黄昏の館

笠井潔

徳間書店

黄昏の館

第一刷／一九八九年九月三〇日

著者　笠井　潔　　発行者　荒井　修　　発行所　株式会社徳間書店

東京都港区新橋四―一〇―一　郵便番号一〇五　電話〇三―四三三―六二三一　振替東京四―四四三九二

装画　宇野亜喜良　装丁　井上正篤

印刷所　本文・㈱廣済堂　カバー・真生印刷㈱　製本所　大口製本印刷㈱

定価は帯・カバーに表示してあります。落丁・乱丁はお取替えいたします。

©Kiyoshi Kasai 1989 Printed in Japan.

〈編集担当　国田昌子〉

黄昏の館

装画／宇野亜喜良

装丁／井上正篤

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

白い光景

書きおえたと思う。これで、ようやく書きおえたと思う。いまや、「黄金の時」は回復されたのだ。心配なのは、このことを忘れてしまいそうな、どうにも頼りない自分の心だけだ。絶対に忘れてはならない。自己探索の旅は終わったということを、どんなことがあろうと忘れてはならない。

あらゆることを知るというのは、はたして人間に許されていることなのか、どうか。そんな疑惑にも襲われる。それでも、いい。それでも、いいのではないかと思う。

いや、書きあげたのは、ずいぶんと昔のことだ。たったいま、それを思い出した。白い壁のあるこの部屋で暮らしはじめてから、時間の意識がひどく混乱している。

思い出したのは、窓の下に栗色の髪の女がいるのを見たせいだ。中庭にあるマロニエの樹の下で、ジュリエットはこちらを見あげていた。どこか憂わしげな表情をしていたように思う。翳(かげ)りをおびたまなざしで見つめられて、これまで長いこと狂っていたことに気づいた。そうだ、あれを書きおえたことさえも忘れていたのだから。

確かに書きおえたはずなのに、なにを書いたのかさえ定かではない。書いた中身は、脳髄を絞り器にかけてみても、思い出せないような気がする。どうでもいい。そんなことは、も

うどうでもいいのだ。吐きそうなほどに暑い、そして、痛い。不快と苦痛が膚に粘りついて、全身が脂汗にまみれる。この不快感を、なんとかできないのだろうか。

なにを書いたのか、そんなことは瑣末だ。とにかく書きおえた。それだけが重要なのだ。忘れてはならない、そのことを忘れてはならない。

昆虫の眼をした男が、こちらを見ている。凝視している。蠅叩きがあるなら、おまえなど、白いはらわたが汚らしくはみ出るほどの力で、とにかく叩き潰してやりたい。しかし、ここに蠅叩きはないのだ。日本にはある。あったはずだ。

しかしフランスでは蠅叩きを見たことがない。いつも自分は、丸めた新聞紙を蠅叩きがわりに使っていた。そう、蠅叩き……。

人間蠅は、ドクトゥールだという。陰険な薄笑いを浮かべながら、自分は医者だと宣告する。なぜ医者なんか、ここにいるんだ。おまけにこいつは、日本人の医者だという。日本人の患者には日本人の医者。いかにも合理的に思える。しかし狂っている。どうして、こんなやつがいるんだ。

汗ばむほどに暑い。眼が痛くなるほどに、壁が白い、なにがあろうとも、この白い輝きを忘れないようにしよう。そして医者。昆虫の眼をした日本人が、わけの判らないことを執拗に囁きかけてくる。眼が痛い、頭が痛い、吐き気が込みあげてくる。

白い、白い、白い。白い光景の中心に、ジュリエットの淫蕩な薄笑いがある。そうだ、ジュリエット。わが永遠の恋人。永遠の恋人の濡れた裂け目。

熱いほどに濡れた肉の谷間。そこに戻りたい。一目散に逃げかえりたい。赤ん坊みたいに手足をまるめて、血の色に粘りつく太腿のあいだの傷口に潜りこんでしまいたい。愉悦と充足にみちた、透明な分泌液にぬれそぼり薔薇色に輝きわたる、あの肉襞の洞窟から追放され

たくない。……そうなんだ、ジュリエット。きみを愛している。
日本人の医者が囁きかける。いまだ『黄昏の館』は存在しない。『黄昏の館』は、いつか書かれるだろう最後の書物だ。黄金の時はある。しかし、黄金の時はない。それはあり、そしてないものだ。
そうだろうか。それはあり、そしてないものなのか。嘘だ、と思う。医者の襟首をつかみ、夢中で叫んでいた。嘘だ、嘘だ、嘘だ。
牛がくる。獰猛(どうもう)な牛だ。ゴムの棍棒を持った鈍重そうな牛男。
判ったよ、あの暗い場所に入ればいいんだろう。万華鏡の夢がふわふわと漂う、ほの暗く、暖かく、沼地みたいに湿り気のある秘密の場所。あそこは好きだ。どこにも、医者だという蠅みたいな男はいないから。ゴムの棍棒を持った牛男もいないから。
だが、そのためには痛い思いをしなければならない。ゴムの棍棒で叩きのめされることが前提なんだ。
だらしなく泣き叫んでいる、自分の声が遠くから聞こえた。愚鈍な牛男に、こんなふうにひざまずいて許しを乞うなど、想像もできないことだ。それでも自分は、よだれと一緒に「許して、許して」という言葉を垂れながしながら、必死で床を這いまわっている。それがおかしい。痛いことなんか、たいした問題じゃない。
こめかみに、牛男のゴムの棍棒が激突した。白い閃光がはじける。網膜が焦げるような閃光のなかに、またジュリエットの蠱惑(こわく)的な横顔が浮かんだ。
ジュリエット、ジュリエット、ジュリエット。きみを愛しているよ。きみが男を破滅させる魔女であろうとも。ぼくはきみに導かれ、そうして永遠の平安を得る。それだけが望みだ。それだけが、ぼくの望みなんだよ、ジュリエット……。

1

外出からもどり、街路にとめた旧型レオーネの窓から、建物の前面にある狭い駐車場を眺めた。またかという不快感で、自然に表情がこわばる。乱雑な駐車で、赤いアウディが左の白線から斜めにはみ出していた。

右手には、紺のゴルフがきちんと停めてある。アウディは一階の、ゴルフは二階の住人の車だ。駐車場のスペースは、ぎりぎり三台分しかない。中央のアウディに侵略されて、ほとんど車体の幅しか残っていない自分のスペースに、のろのろと車を入れはじめる。

三度、ステアリングを切り返さなければならなかった。塗装の色があせた青の中古レオーネが、左手の階段に車体を擦りつけるようにして、ようやく停止する。階段に遮られて、運転席のドアが開かない。右腕に大きな食料品の紙袋をかかえ、助手席のドアから這いだす以外なかった。

クラクションを鳴らして女を呼びつけ、赤い車を、正当な駐車位置まで移動するように命じる。普通なら誰でもそうするのだろう。簡単なことなのに、それが、どうしてもできないのだ。暴力的な雰囲気の男が相手ならともかく、階下の若い女に威圧されるというわけではない。

ただ、嫌なのだ。女との面倒なやりとりを考えただけで気が萎え、どす黒い嫌悪感と疲労感に全身の血が淀んでいきそうな気分になる。自分の場所を侵害されたという不快感は残るにせよ、まだ、ひ

とりで耐えた方がいい。
やり場のない憤懣で、乱雑にドアを閉じる。黄昏の街路に、鈍い音が響いた。道路までもどり、あらためて玄関前の階段を登りはじめる。
晩秋のひえびえとした光景が、夕闇に沈んでいた。目黒にある住宅地の裏通りは、この時刻、人影もまばらだ。サラリーマンが帰宅してくるには、まだ少しの余裕がある。
短い階段を登りきると、あちこち煉瓦色の装飾タイルが剝がれている三階建のビルの、正面のガラス扉になる。フロアごとに三世帯の住居が設けられている、古ぼけた小型マンションだった。
建物の玄関ホールまで、流行遅れのポップスが大音響で響いてくる。非常識な一階の女が、鼓膜の破れそうなボリュームで聞いているのだろう。粘りつくような不快感が、また胸の底から、じくじくと滲みだしてくる。
ホールのコンクリート壁には、メールボックスが三つならんでいた。いちばん左手の金属箱には、矩形に切られたボール紙の名札がさしてある。『宗像冬樹』。転居のとき手伝いにきた気のいい友人が、わざわざ書いてくれたものだ。
高校時代からの、日本ではただひとりの友人だった。『昏い天使』の作者のことを新聞か雑誌で知り、出版社を通して連絡してきたのだ。卒業後、デザイン関係の仕事に進んだというだけあり、名札は綺麗な仕上がりだが、いまは埃に汚れて黄ばんでいる。
あの友人が癌で死んでから、もう一年になる。再会したのはフランスから帰国したばかりのときだったが、あのころもう、痩せて顔色の悪い友人の体内では、旺盛な生命力で癌病巣が増殖していたのかもしれない。
外出中に、郵便が配達されていた。メールボックスの蓋を開くと、雑誌や書籍の封筒が音をたてて床に落ち、紙の小山をつくる。かがんで拾いあげ、大判封筒の束を買い物の紙袋になかば押しこみ、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

なかば積みかさねるようにした。不必要な足音をたてないよう神経質な足どりで、屋内の階段を登りはじめる。

一階には二十代の若い夫婦が、二階には額の禿げた中年男がひとりで住んでいる。どんな仕事をしているのか、二階の住人は幾日も続けて家をあけることが多い。そのぶん静かな中年男は、無神経で非常識な若夫婦と比較して、はるかに好感のもてる隣人というべきだろう。

たまたま階段やホールで出遇うと、こだわりのない微笑を浮かべて会釈してくる。それでも、自分から進んで顔を合わせるような気にはなれない。外出しようとして階段で物音が聞こえれば、たとえ二階の住人らしくても人の気配が消えるまで、いつも旋錠したドアの内側で息を殺しているのだ。

二階の男が引っ越してきたのは、半年ほど前のことだ。この三世帯用のマンションでは、いちばんの新参者ということになる。はじめから住んでいる一階の夫婦は、入居したときから陰険な眼で、いつもこちらを見ていたような気がする。

あの夫婦には、ひそかに監視されているような疑惑さえ覚える。一階の女が三階のメールボックスを開き、封筒を調べている現場を目撃したこともある。そのときも女は、厚かましい顔つきで、余裕たっぷりに見返してきた。

なにか弁解の言葉でも、洩らしていたのかもしれない。だが記憶にあるのは、赤い蛭がおぞましく蠢いている、吐きたいほどに不快なイメージだけだ。それは口紅を塗りたくられた、若い女の唇だった。

屋上で洗濯物を干しているとき、自分の部屋のドアが閉じたような気がして、急いで階段を降りてみたこともある。そのときもドアの前にいたのは、あの一階の女だった。鍵がかけられていないのをいいことに、無断で室内まで入りこんだのではないか。そんな疑念に襲われたが、証拠はなにもない。

なぜ、そんなふうに干渉してくるのだろう。まるで監視しているみたいに、陰険に振舞うのだろう。

心を締めつけられるような圧迫感と、コールタールみたいに粘りつく不快感が、拭っても拭っても消えることがない。

左手で鍵をあけ、金属質の音で陰気にきしむスチールドアを開く。狭い玄関間には、作りつけの靴箱があり、その上で、留守番電話のランプが赤く瞬いていた。右腕でかかえていた紙袋を床におき、ためらいがちに再生のスイッチを入れる。スピーカーから中年男の親しげな声が聞こえはじめた。

「……また居留守だな。文芸書房の三笠だが、あとから電話してほしい。今月の、きみのエッセイは読んだ。悪くないね。そのことも含めて、少しばかり話したいんだが」

録音されていたのは、ありがたいことに、親しい編集者からの電話ひとつきりだった。居留守といわれたのは、家にいるときも二十四時間、留守番電話のスイッチを入れ続けているためだろう。

昔から、電話のベルの音に耐えられなかった。こちらの都合も気分も関係なく、ふいに何者とも知れぬ相手から、一方的に応答することを強いられるのだ。電話が鳴りはじめると、ときとして、胸苦しい不安に襲われて竦みあがることさえある。

キッチンまで紙袋を運び、野菜や肉など必要な品を冷蔵庫におさめた。コーヒーメーカーをセットしてから、リビングのソファにもたれ郵便物を点検しはじめる。毎月この時期になると、かなりの量の郵便が届く。だが、ほとんどは出版社から送られてくる各種の雑誌類で、それにダイレクトメールの封筒が混じる。私信は、ほとんどない。

意味なく送られてくる多量の郵便物だけが、社会との唯一の通路だ。小説関係の雑誌が寄贈されてくるあいだは、まだ自分も完全に忘れられたわけではない。そう思うと、また苦い焦燥感が湧きあがってくる。

コーヒーメーカーが、ピッと音をたてた。封筒から出した本や雑誌をテーブルに重ね、おもむろに立ちあがる。キッチンで、熱いコーヒーをマグカップに注いだ。電灯をつけ、オーディオのスイッチ

を入れる。室内に、加藤和彦の『ルンバ・アメリカン』が流れはじめた。

手にしたのは、三笠が勤務している出版社発行の文芸誌だ。雑誌には「ひとつの短篇小説」というエッセイ欄があり、そこに宗像冬樹の名前も印刷されていた。他に書いているのは、戦後派の老大家と若手の女流作家の二人。

死ぬまで終わりそうもない大長編を書きついでいる老大家は、ポオの『メエルシュトレエムに呑まれて』をあげ、作品よりも華やかな言動でマスコミに登場することが多い若手女流は、グラスの『ぼくの緑の芝生』について書いていた。

老大家の選択は読者の想像の範囲内というべきだが、若手女流が『ブリキの太鼓』の作者による若書きの短編をあげているのは、やはり意外な気がした。

テーブルの酒壜を取りあげて、カルヴァドスを数滴、マグカップに垂らした。熱いブランデーコーヒーを啜りながら、自分が書いた文章に眼を通しはじめる。タイトルは、『超越の扉』。

ぼくは、短篇小説のよい読者ではない。珠玉の短篇こそ文学の極致と信じておられる先輩作家から、きちんとした短篇を書くべきだという助言、むしろ苦言を呈されたこともある。

子供のときから、とにかく長い小説が好きだった。文庫本で厚さが二センチ以上もある小説を見つけると、それだけで嬉しくなってしまう。それが二冊も三冊も続くようなら、喜ばしい気持は、たちまち興奮から歓喜の域にまで達していく。

『戦争と平和』や『カラマーゾフの兄弟』。『ウィルヘルム・マイスター』や『魔の山』。世界の名作と呼ばれるこの種の長篇小説なら、自宅に備えられていた世界文学全集で、中学生時代にあらかた読んでしまっていた。もちろん、長ければなんでもいいというわけではない。長い小説については基本的に寛容な読者のつもりだが、それでも退屈に耐えられないで、途中で捨ててしま

った作品もある。よく覚えているのは、『ジャン・クリストフ』と『チボー家の人々』だ。ぼくはロマン・ロランやマルタン・デュ・ガールから、愚劣な大長篇が存在するという真理を学んだように思う。

世界には面白い長篇小説が、一生をかけても読みきれないほど、数かぎりなく存在するように信じられていた。しかし、そんな黄金時代がいつまでも続くわけはない。文学全集に収録されているような大長篇の、ほとんどを読みつくしてしまえば、あとは新作を探す以外にない。高校から大学にかけ、厚さが二センチ以上もある新刊の文庫本であれば、それだけで手にとり読みはじめてしまうという濫読の時期が続いた。この時期の最大の収穫が、おそらくコリン・ウイルソンの『賢者の石』である。

こんなわけで、どう考えても「ひとつの短篇小説」について語るような柄ではないのだが、それでも挙げたい作品が皆無というわけではない。二十世紀の長篇小説の白眉は、やはり『失われた時を求めて』であろうという通説を支持するにせよ、その千分の一の分量で、プルーストの主著にも似た感動をもたらしうる作品が存在するのである。『塀についたドア』、作者はH・G・ウエルズ。

ぼくは最初期からの日本SFの愛読者だが、そのころ日本人の手になるSF小説は、いまから思えば信じがたいけれども、全部で二十冊に満たなかった。それだけではない。手にできる翻訳SFさえ、極度に品薄だった。たぶん『宇宙戦争』や『タイムマシン』の作者が書いたものだということで、普通なら見むきもしないはずの短篇集を手にしたのだろう。時期は中学三年か高校一年か、とにかく十五、六歳のころだ。

以下、『塀についたドア』について多少とも仔細に紹介する。森鷗外や志賀直哉の短篇ならともかく、この種の文芸誌の読者で『宇宙戦争』の作者が書いた短篇作品について知識があるよう

な人は、おそらく稀であるだろうから。

『塀についたドア』の主人公ウォーレスは、四十歳になろうとしている有能な政治家である。ある時この人物が、不運な事故で死ぬ。ウォーレスは深夜、工事現場にめぐらされた板塀の粗末なドアから、誤って大きな穴に転落し墜死した。

しかし語り手は、それがたんなる事故であるとは信じられない。死の直前に、ウォーレスから奇妙な告白を聞かされていたからである。幼年時代にウォーレスは、「白い塀についた緑のドア」に最初にであう。作者によればそれは、「実在の塀を通じて、不滅の実存へみちびいてくれるドア」だった。

偶然に街にさまよい出た幼児のウォーレスは、どこかの路地にある緑のドアを抜けて、現世を超えた至福の楽園にいたる。そこは、ようするに超越論的欲望の焦点をなすべきユートピア的世界である。ドストエフスキイ風にいえば、獅子と羊がたがいに抱擁して「すべてよし、汝は正しかりき」という歓喜の叫びをあげているような、光輝に満ちた特権的な異世界なのだ。

もちろんウエルズは、ユートピアのディテールについて小説的な造型を怠ってはいない。優しい豹や白い小鳥、華麗な花園や緑の並木道、大理石の彫像、美しい娘、子供たちの楽しい遊戯、等々。

それが短篇小説の技法的限界なのかもしれないが、ウエルズの描くユートピア的イメージは、それだけで「この一作」といえるほどに卓越しているわけではない。短篇である以上、プルーストのコンブレ体験を超えるような描写の密度など、そもそも方法的に期待しえないというべきであろう。

といって楽園の可能と不可能を、ユートピア的欲望の必然性と挫折の必然性とを、執拗な文学的弁証法で飽くことなく追及していくドストエフスキイの長篇小説の域に達しているというわけ

でもない。こうした点からいえば、やはり短篇は長篇の迫力に及ばないというのが、短篇小説にあまり関心をもてないぼくの偏見である。

この作品が印象的なのは、緻密なユートピアのイメージや、それをめぐる避けがたい論理の葛藤について主題的に探究しているからではない。強いていえば、ときとして淡い夢によぎる人生の断面を、心に触れるだけの深みにおいて、あくまでも象徴的に露呈しているからなのだ。

幼児のウォーレスは、いつか楽園から散文的な日常生活に連れもどされていた。ふたたび現世に追放された幼児は、泣き、叫び、悲しみ、失われた楽園の思い出にふける。だが、記憶は時とともに、いつか曖昧(あいまい)なものに変質せざるをえない。

成長するにつれ主人公の前には、しばしば楽園にいたる緑の扉が出現するのだが、ついに一度たりとも扉を押すことはない。すでに少年は、現実世界の論理に染められていたからだ。最初は小学生のとき、通学途上のことだった。優等生のウォーレスに遅刻は許されない。少年は緑の扉を横目で見ながら、せわしげに学校に急いだ。

このようにしていつも、人生の転機になるような瞬間に、緑の扉が主人公の前に出現する。だがウォーレスは、つねに政治家としての世間的成功にいたる方向を選択し続け、惹かれつつも緑の扉に手を触れようとはしなかった。そして最後に、大臣として国会に急ぐ途上に、あの宿命の扉が出現する。

議員としての義務感が、主人公を踏みきらせない。与野党の勢力は伯仲している。ウォーレスが採決に参加することを放棄すれば、政府の法案は否決されるだろう。すでに政治家としての世間的成功に飽いている主人公は、耐えがたい誘惑を押しころし、これが最期であると自分にいい聞かせながら、あくまで魅惑的に誘いかける緑の扉をやりすごした。

死の三カ月前、ウォーレスは語り手に、次のように語る。「ちょっといわせてくれたまえ、レ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.